中国詩跡考１（安徽省）

植　木　久　行

平成17年度から３年間にわたって、「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築－詩跡の概念・機能・形成に関する研究－」に対して、科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）が交付されることになった。この課題を研究する一環として、初めの２年間に一度ずつ中国の詩跡の実地調査と資料・情報の収集を行うことにした。

平成17年度は、９月３日（土）から９月13日（火）にわたって、江南地方の詩跡を集中的に実地調査した。この調査に参加した者は、筆者のほかに、李梁（弘前大学）・松尾幸忠（岐阜大学）・許山秀樹（静岡大学）の３人である。今回の主要な探訪地は、江蘇省鎮江市（潤州）→揚州市→安徽省滁州市→和県→馬鞍山市→当塗県→宣城市（旧・宣州市）→南陵県→涇県→九華山→池州市(旧・貴池市）である。

今回の調査によって、詩跡の再建・復元に関する新しい知見が得られた。たとえば、鎮江市では王昌齢の詩にちなむ芙蓉楼が、本来の場所とは異なる金山公園内に造られていた。また揚州市では、大明寺の境内に九層の棲霊塔が再建され、観光産業に役立っていた。また本来、城外にあった二十四橋（１つの橋の名。本来の用法とは異なる）が、古典詩語の持つ高い知名度のために、瘦西湖公園の中に組み込まれていたことも、この意味で印象的であった。

揚州市では、杜牧の詩にちなむ竹西公園（竹西亭・月明橋)、さらに杜牧の詩に見える禅智寺(後の上方寺）跡の探訪は、有意義であった。現在中国では、都市の変貌と価値観の多様化が激しく、近年まで伝存していた詩跡も地上から失われて、その在りかさえ不明になるものが多い。たとえば、北宋の詩人、梅堯臣の故郷は、宣城市の南郊外であるが、今回の探訪では、その祠の所在すら不明であり、当地の故老の話でようやく跡地を探し当てることができた。ゆかりの碑石が小川(梅渓）の橋として利用されている現状に接して、私たちは愕然とした。

当塗県では、汗を流しつつ包子山に登って、李白が敬愛した謝朓ゆかりの青山謝公祠・謝公井の跡地を探索したことも忘れがたい。また宣城の敬亭山では、山中の太白独坐楼を訪ねる途中、玄宗の妹・玉真公主の墳墓の存在を知り、そのほとりには、李白が飲用したと伝える皇姑泉（相思泉）もあって、思いもかけない収穫を得た。

謝朓・李白・杜牧などの詩に彩られた宣城市では、謝朓楼・宛渓・句(こう)渓・開元寺塔・響山などを訪ね、入手した市街図も参照して、それぞれの位置関係や距離感を確認することができた。かつて明鏡にたとえられた宛渓は、現在かなり汚濁しており、句渓は今日、渓流としての姿はすでに失われて、部分的にしか残存していなかった。李白や梅堯臣の詩に歌われた響山の探索では、民家や畑

の間を縫うように歩き、当地の人に尋ねて、ようやく確かめ得た時の思いは忘れがたい。

滁州の酔翁亭、涇(けい)県の水西寺の塔、桃花潭、李白「秋浦の歌」に歌われた池州の清渓河（白羊河）など、それぞれ印象深く、杜牧の詩にちなむ杏花村古井文化園などは、観光資源の目玉として美しく整備されていたが、同じ池州の斉山は少し荒廃感を漂わせていた。

本稿は、安徽省の詩跡調査を踏まえた論考である。今回取り上げた詩跡は、涇県の①桃花潭　②水西寺、宣城市の③謝公亭・謝亭　④宣州開元寺　⑤響山　⑥広教寺（俗称双塔寺）、滁州市の⑦西澗　⑧琅琊山　⑨酔翁亭、[附録] 和県の⑩陋室である。

涇　県

①桃花潭

涇県（宣城市の西南）の西南約40キロ、桃花潭鎮にある、涇川（青弋江(せいよくこう)中段の名。涇県の名の由来となる）上流の、清澄な深い潭(ふち)の名。天宝14載（755）ごろに作られた李白の「汪倫に贈る」詩、「李白　舟に乗って　将に行かんと欲す、忽ち聞く　岸上　踏歌の声、桃花潭水　深さ千尺、及ばず　汪倫　我を送るの情に」によって、忘れがたい詩跡となった。

汪倫とは、李白が涇県に遊んだとき、美酒をもてなしてくれた「村人」の名。近年発見の家譜によれば、汪倫は名を鳳林ともいい、先祖伝来の別業（荘園）を持つ当地の豪族であり、涇県の長官にもなったことがあるという。(注１)　李白を招いたとき、すでに桃花潭のほとりに閑居していた、名門の豪士であったらしい。

桃花潭

本来測りようもない心の深さ。それを眼前の潭の深さ千尺との計量的比較を通して、生き生きと実感させる巧みな着想である。「桃の花さく潭」という地名も、美しい。

北宋の楊傑は、「太白の桃花潭」詩（『無為集』巻７、題下注に李白の詩を引く）のなかで、謫仙人李白を思慕して、こう歌う、「桃花潭は似たり　武陵（陶淵明の「桃花源記」の舞台、武陵桃源）の渓に、太白の仙舟　去りて迷わんと欲す。岸上の踏歌　人　見えず、年年　空しく鷓鴣（南国の鳥の名）の啼く有るのみ」と。同じく北宋の胡瑗「石壁」詩には、李白の同時期の作「汪氏の別業に過ぎる」２首（胡瑗「石壁」詩序には、詩題を「涇川の汪倫の別業に題す」２首とする。[注２]）を踏まえつつ、「李白　渓山を好み、浩蕩として　涇川に遊ぶ。詩を題す　汪氏の壁に、声は動かす　桃花の洲を」云々と歌う。「声は動かす　桃花の洲」は、「汪倫に贈る」詩を踏まえた表現であろう。

元の潘白修は、「李伯時　太白の舟を泛ぶる小像を画く」という題画詩（『元詩選』２集巻17）を作り、「一笑して髯を掀ぐる［口ひげを動かす］は　底事にか縁る、桃花潭上に　汪倫を見る」という。「汪倫に贈る」詩にもとづいて作成された絵であったらしい。(注３)

明の郭奎の「涇県」詩（『望雲集』巻４）には、「馬を立てて　空しく慙づ　李白の題（詩）に」と歌った後、「但だ願う　功成りて　身退くこと早きを、桃花潭上　幽棲を結ばん」と歌い、同じ明の宗臣「涇県にて桃花潭を望む」詩（『宗子相集』巻11、題下注に「即ち李白　詩を題して汪倫に贈る処」とある）には、「桃花潭水　陵陽（宣城）に近く、潭上の春風　石梁に満つ。流水　仙客に随って去らず、秦人　何ぞ必ずしも三湘を渡らん」云々とあり、桃花潭附近は 武陵桃源のごとき別天地にも見立てられていく。他方では、離別（送別・留別）の地として 桃花潭の語を用いたものも見られる。(明の邵宝「馬天常と留別す」[『容春堂続集』巻５] など)　美しい友情につつまれた離別の地としてのイメージからである。

こうしたなか、『大明一統志』巻15，寧国府・山川の条に「桃花潭」の名が見え、「涇県の西南一百里に在り、深さ測るべからず」の後に李白の詩が引用されて、詩跡として確立する。他方、明代、汪倫が李白を見送ったとされる渡し場（東園古渡)、桃花潭の東岸（桃花潭鎮翟村）の地は、２人の深い友情を記念して「踏歌古岸」と呼ばれ、岸辺に２層の「踏歌岸閣」が建てられた。清の乾隆年間、民国初期の再建を経て、今もなお現存する。(注４)

今日、桃花潭西岸の切り立つ岩（彩虹岡）の上には、李白をしのぶ「懐仙閣」が再建されている。そこには、「『宛陵郡志』の記載に拠れば、塁玉墩・彩虹岡は、倶に（涇）県の西　桃花潭の上りに在り。唐の李白、万巨・汪倫と与に詠遊せし処」と記す石碑が、岩のうえにはめ込まれている。(注５)

その彩虹岡の南端あたりに、汪倫の墓がある。墓碑には、「光緒十一年（清末の1885年）季秋（９月）重建/謫仙題/　史官之墓汪諱（この１字は小字）倫也」とある。傍らに立つ「重修汪倫墓碑記」(1983年、涇県陳村郷人民政府建立）によれば、汪倫の墓は、もともと涇県水東（鎮の名、桃花潭鎮の旧名）翟村の東、金盤献果の高地にあった。1958年、陳村水電站（水力発電所）を建設したとき（注６)、破壊されたが、文化部門が資金を配分して彩虹崗（岡）に再建したという。

なお旧墓のあった地の近くには、清の乾隆32年（1768)、翟氏一族が建てた文昌閣があった。文

昌閣の創建は、李白の来遊を記念し、一族の文風の隆盛を顕すためとされ、現存のものは1990年の再建、３層八角、高さ25メートルの木造建築である。(注７)

今日、付近は「桃花潭景区」として整備された観光地となっている。

（注１）　詹鍈主編『李白全集校注彙釈集評』（百花文芸出版社、1996年）巻11,「汪倫に贈る」詩の条参照。
（注２）　清の王琦輯注『李太白全集』巻34，附録４，叢説に引く『寧国府志』所載の胡安定（名は瑗）「石壁」詩序参照。「石壁」詩の１部も引かれている。
（注３）　明の王慎中「桃花潭水の別意の巻に題す」詩（『遵厳集』巻７）にいう、「水に暎(うつ)る桃花　千尺の潭、水は花の色を涵して　転(うた)た深きを看る」と。これも、題画詩である。
（注４）　蕭夢龍主編『江南勝跡』(江蘇科学技術出版社、1993年）に拠る。『嘉慶重修一統志（大清一統志)』巻115，寧国府の条には見えない。
（注５）　『嘉慶重修一統志（大清一統志)』巻115，寧国府、山川、桃花潭の条に、「涇県の西南に在り。唐の李白、万巨・汪倫と与に此の潭に遊ぶ。上りに釣隠台・彩虹岡・墨玉墩有り。皆当時遊詠の所。李白の詩に、『桃花潭水深さ千尺』と。即ち此なり」とある。
（注６）　この時できた人造湖が、太平湖（旧名は陳村水庫）である。
（注７）　主に（注４）と同じ蕭夢龍主編『江南勝跡』による。 一説に 乾隆35年（1770）に建てられたともいう。

〔補　注〕

清の袁枚（1716～1797)『随園詩話補遺』巻６（顧学頡校点、人民文学出版社、1998年版）にいう、「唐の時の汪倫なる者は、涇川の豪士なり。李白、将に至らんとするを聞き、書（手紙）を修めて之を迎えんとして、詭(いつわ)りて云う、『先生は遊を好むか、此の地に十里の桃花有り。先生は飲を好むか、此の地に万家の酒店有り』と。李、欣然として至る。乃ち告げて云う、『「桃花」は、潭水の名なり、並びに桃の花無し。「万家」は、店の主人、姓万なり。並びに万家の酒店無し』と。李、大笑し、款(よろこ)びて留まること数日、(汪倫は）名馬八匹、官錦十端を贈りて、親ら之を送る。李、其の意に感じて、桃花潭絶句の一首を作る」と。この面白い話は、近年しばしば桃花潭の解説に引用されるが、その拠り所について、袁枚自身全く触れておらず、未詳である。 本条には、続いて「今　潭は已に壅塞(ようそく)す。張惺斎(炯…原注）題して云う、『蝉は一葉を翻して空林に墜ち、路は桃花を指して　尚お尋ぬ可し。怪しむ莫かれ　世人の交誼の浅きを、此の潭は　復た旧時の深さに非ず』」云々とある。桃花潭が壅塞して浅くなったという指摘は、張惺斎の詩にもとづく推測なのであろうか。李白当時の桃花潭の深さが「千尺（約300メートル)」という詩的表現しか伝わらない現状では、壅塞について的確な判断を下しかねるが、現在の桃花潭は、昔に比べてかなり浅くなっている可能性が高い。実際に訪れてみた印象では、極度に深い潭には見えなかった。

②水西寺

宣城市の西南、涇県の城(まち)の西郊2.5キロの地、「林壑深邃」(『方輿勝覧』巻15）な水西山にあった古刹の名。水西とは、涇渓（涇県内を流れる青弋江のこと、賞渓ともいう）の西側にあるための呼称である。涇渓を隔てて涇県城と向き合う。李白が晩年、「水西に遊び、鄭明府に簡(よ)す」詩のなかで、「天宮　水西寺、雲錦（朝焼け）のごとく　東郭に照る。清湍(たん)（清き早瀬）　廻渓に鳴り、緑竹　飛閣を繞る。涼風　日び瀟灑、幽客（隠士）　時に憩泊す。五月（盛夏）　貂裘(ちょうきゅう)（暖かいテンの皮衣）を思い、秋霜落つと謂(おも)言えり」云々と歌ったところである。

清の趙宏恩ら監修『江南通志』巻47，寧国府 涇県の条にいう、「崇慶寺は県の西に在り。南斉の永平（永明？）元年（483？）に建て、凌厳と名づく。唐の上元の初め（760)、天宮水西寺と改む。

大中（847〜859）の時、相国の裴休、重建し、黄蘗（＝黄檗）禅師住持す。宋の太平興国(976〜983)（注１)、今の名を賜う」と。これによれば、李詩は最晩年の上元年間（760〜１）の作となろう。(李白は762年没)

中唐の詩僧皎然「峴山（浙江省湖州市南）にて崔子向の　宣州に之きて、裴使君に謁するを送る」詩にも、「秋天　水西寺、古木　宛陵城」と見え、中唐前期、すでに宣城（宛陵）付近の名刹として知られていた。(注２)

続いて晩唐の杜牧が、宣州（宣城）滞在時に水西寺を訪れている。後に「昔遊を念う」その３に、「李白　詩を題す　水西寺、古木　廻巖　楼閣の風。半醒半酔　遊ぶこと三日、紅白　花は開く　山雨の中」と歌い、涇県の水西寺を詩跡化した。(注３）　寺のある水西山自体も、北宋末の曾紆「宣州の水西」詩に、「宣州の水西　天下の勝」(『方輿勝覧』巻15）と歌われている。

ただ水西山には、唐代すでに水西寺（宝勝寺）・天宮水西寺（崇慶寺）・水西首寺（唐の上元年間建立。唐末の乾寧２年［895]、白雲院となる）の、いわゆる水西３寺が対峙して（注４)、亭台・楼閣が林立していた。

従って単に水西寺といった場合、厳密には３寺のどれを指すか未詳であり、３寺の総称としての用例もあろう。宣城出身の北宋の著名な詩人、梅堯臣「擬水西寺東峰亭九詠」詩の水西寺は、水西首寺を指している。ただ詩跡化の源泉である李詩との関係でいえば、主に天宮水西寺、後の崇慶寺が中心となろう。

北宋の徐鉉「元上人の　水西寺に還るを送る」詩（『騎省集』巻22）には、「李白　高吟の処、師帰りて　竹関を掩さん」という。また南宋の李彌遜「秋霜閣」詩（『筠溪集』巻14）にも、「十月　水西寺、興窮まるも　還お為に留まる。幾く（李）太白を傷ましむるを知らんや、五月　貂裘を念うと」とあり、原注として山中の寺院の肌寒さを詠んだ李白の詩句（五月思貂裘、謂言秋霜落）を引いて、秋霜閣の名の由来を説明する。宣城出身の清初の著名な詩人、施閏章「水西の行」の序には、「水西寺は黄蘗道場為り。……李太白、数ば嘗て遊詠」し、「此の山は太白を以て名あり」云々とあり、「釣魚台下　青玉を浮かべ、秋霜閣畔　貂裘を思う」と歌っている。秋霜閣は崇慶寺の背後にあって、「水西の勝を擅にす」(『大清一統志』巻80）るところという。

現在、水西３寺のうち現存するものは、宝勝寺（黄蘗寺）のみである。その前（西）には、北宋の崇寧年間に建て始め、大観２年（1108）に成る七層（高さ50メートル）の、いわゆる大観塔（崇寧塔、水西大磚塔）がそそり立つ。宝勝寺から少し離れた右側（北)、白雲泉のほとりに位置する七層（塔頂は崩壊）の古塔は、南宋の紹興31年（1161）に建造された紹興塔（小方塔、乾応塔）である。この２つの古塔は「水西の双塔」と呼ばれ、なかでも 堂々たる威風を持つ大観塔は、今もなお登って眺望を楽しむことができる。李白・杜牧ゆかりの天宮水西寺（後の崇慶寺）が失われた現在、宋代の古塔付近を散策して、在りし日々を偲ぶほかないのである。ただし『大清一統志』巻80、宝勝寺の条によれば、水西寺の旧名をもつこの寺こそ、「唐の李白・杜牧、倶に詩有りて游びしを紀す」ところとする。

（注１）　現在、大観塔のそばにある「水西双塔記」によれば、太平興国５年（980）、崇慶寺に改名されたという。
（注２）　北宋の林逋「送思斉上人之宣城」（『林和靖集』巻１）にも、「蕭閑水西寺、駐錫莫忘帰」とある。
（注３）　南宋の韓元吉の詞「水調歌頭」（和麗祐甫見寄）に、「紅白山花開謝、半酔半醒時節、春去子規愁。夢繞水西寺、回首謝公楼」とある（『南澗甲乙稿』巻７）。これは、明らかに杜牧の詩を踏まえる。
（注４）　前引の『江南通志』巻47，寧国府涇県の条や、李白「山僧に別る」詩に対する清の王琦注（『李太白全集』巻15）等によれば、宋代以降の宝勝寺（旧名は水西寺・五松院、北宋の元豊５年［1082］の改名）が水西寺、崇慶寺が天宮水西寺、（白雲泉のほとりにある）白雲院が水西首寺である。

（補　注）
唐の宣宗に「涇県の水西寺に題す」（大殿連雲接賞渓、鐘声還与鼓声斉。長安若問江南事、説道風光在水西）という詩が伝わる。『万首唐人絶句』巻69，『全唐詩』巻４等所収。唐の宣宗李忱（しん）は太子であったとき、宝勝寺で出家・隠棲したことがあり、この詩句を作ったという。またゆかりの太子泉の名も伝わる。（現地で収集した「安徽水西国家森林公園旅游風景区」と題されたパンフレットによる）　清の施閏章「水西の行」の序の、「又た伝う、唐の宣宗竜潜の処」の語は、この伝承に基づく。古くは、『方輿勝覧』15，寧国府、水西山の条に引く『郡志』に、宣宗詩の後半２句を引く。　また宋の華岳「早春十絶」（其７，水西）には、「詩道風光在水西、水西我意未為奇」という。（『翠微南征録』巻11）　上句は、宣宗の詩を踏まえている。

宣　城

③謝公亭・謝亭

六朝・斉の詩人謝朓が、宣城郡太守在任中（495～496年）、零陵（湖南省）の内史として赴任する友人、范雲を見送った場所とされ、北宋の黄裳『新定九域志』巻６，宣州の条に、「斉の宣城太守謝玄暉（朓）置く」という。（注１）　現在の宣城市区の北側、宛渓・句渓（こうけい）（ただし、現在、その跡が部分的に残存するのみ）・水陽江の合流する三叉河付近（「宣城市交通導游図」山東省地図出版社、2005年１月第２版によれば、上新村に属する地）である。（注２）

謝朓が、范雲を見送った本来の送別地は、建康（南京市）の西南郊外の新亭（労労亭）であったが、李白はあえて当地の伝承に従って「謝公亭」詩を作り、「謝亭は　離別の処、風景　毎（つね）に愁いを生ず。客は散ず　青天の月、山は空し　碧水の流れ」云々と歌う。（注３）　謝亭は、謝公亭の略称である。

晩唐の許渾は、「謝亭送別」詩（注４）のなかで、「労歌（「労労亭歌」の略。送別の歌の意）一曲　行舟（旅立つ舟のともづな）を解く、紅葉　青山　水　急に流る」と歌いあげ、宣城の著名な送別の詩跡として確立した。（注５）　少し後の池州出身の詩人、張喬の「謝公亭懐古」詩（注６）にいう、「六朝の旧跡　詩を遺（のこ）して在り、三楚の空江　雁有りて廻る」とある。遺詩とは、謝朓の「新亭の渚にて范零陵雲に別る」（『謝宣城集』巻３，『文選』巻20）を指す。また李洞の「張喬の下第して宣州に帰るを送る」詩には、「成る無くして　来往して過ぎ、謝亭の松を折り尽くす」という。この謝亭の語も、宣城の離別の地としてのイメージを踏まえたものである。

北宋の李彭「潤上人の　宛陵（宣州）に帰るを送る」詩（『日渉園集』巻１）に、「唯だ謝公亭のみ有りて、頗る復た清夢に到る」というのは、すでに述べた離別の地としてのイメージを踏まえて望郷の念を表したものであろう。南宋の朱翌「宣城書懐」（『灊（せん）山集』巻３）中の、「謝公の亭　范

(雲）に別る」は、既述の伝承を踏まえる。

明の湯右曽の詩「朱立山太守　新詩を枉げられて奉答す」(『懐清堂集』巻６）の、「彷彿たり白綿　紅雨の両句に、謝公の亭外　旧青山」(注７）や、清初の著名な宣城出身の詩人、施閏章の、「郝元公学博　母艱（母の死）を以て潁州に帰る」詩（『学余堂詩集』巻31）の「謝公亭畔の路、相送れば　離愁満つ」など、謝公亭には、いずれも離別の悲しみがまつわりつく。

伝承（幻想）に従って作られた李白詩の力によって、宣城の詩跡と化した謝公亭そのものは、今日すでに失われているが、その跡地とされる付近は、今もなお舟の渡し場となり、江南の風情に満ちた景勝地である。我々一行は、のどかな風景を眺めつつ、しばし懐古の情にふけった。

（注１）　南宋の葉廷珪『海録砕事』巻４下にもいう、「謝公亭、在宣城。太守謝玄暉置。范雲為零陵内史、謝送別于此」とある。『輿地紀勝』巻19、謝公亭の条には、「在宣城県北二里。九域志云、『斉太守謝玄暉置』。旧経云、『謝玄暉送范雲零陵内史。此其処也』」という。

（注２）　宛渓・句渓（現在は宛渓のみ）は、長江の１支流・水陽江にそそぐ。

（注３）　『李太白文集』（宋版）巻20の題下原注に「蓋し謝朓・范雲の游ぶ所」とある。李白はまた、「敬亭の北の二小山に登る…」詩（『李太白文集』巻19）にも、「客を送る　謝亭の北」という。

（注４）　許渾が大中４年（850)、潤州城（江蘇省鎮江市）南郊の丁卯澗村舎で手写した自撰作品集の一部分「唐許渾烏糸欄詩真蹟」(南宋の岳珂『宝真斎法書賛』巻６所収）には、「謝亭送客」(謝亭にて客を送る）と題する。

（注５）　中晩唐の姚合に「遊謝公亭」詩（『全唐詩』巻500）がある。

（注６）　『文苑英華』巻308所収。『全唐詩』巻639には、「題宣州開元寺」の異文として注される。

（注７）　原注に「太守に『白綿　細草に鋪き、紅雨　芳渓に落つ』の句有り。往事　敬亭に在りて作るなり」とある。

④宣州開元寺

宣州（宣城）城内にあった名刹。より詳しく言えば、州庁（県庁）の北の陵陽山第三峰（現在の宣城市区・開元小区、区政府の東北に位置する［注１］）に置かれ、宛渓（境内の東側を北流する）に臨む広大な寺院の名。著名な謝朓楼はその南に、また宛渓にかかる済川橋（李白詩の双橋の１つ。現在の名は東門大橋）はその東南にあった。東晋期に創建された寺は、初め永安寺、初唐期に大雲寺、そして玄宗の開元26年（738)、開元寺となり、「蘭若（寺院）中の最も勝れし者」(『大清一統志』巻80）であった。北宋の景徳年間（1004～７)、景徳寺となって以降は、清代・民国まで景徳寺として存続した。

晩唐の杜牧は、観察使の幕僚として、生涯に２度、宣州（宣城）に滞在した。開成３年（838)、36歳のとき、寺の古い歴史に思いを馳せつつ、楼上から眺望した感懐を、「宣州開元寺の水閣に題す」詩のなかで、「鳥去り鳥来る　山色の裏、人歌い人哭す　水声の中。深秋　簾幕　千家の雨、落日　楼台　一笛の風」云々と歌った。

また同じ頃の作、「宣州の開元寺に題す」詩には、広大で静謐な境内の様子が、「楼は飛ぶ　九十尺、廊は環らす　四百柱。高高下下の中、風は繞る　松桂の樹。青苔　朱閣に照り、白鳥　両に相語る」云々と描写されている。さらには、「小楼　纔かに受く　一床の横たわるを、終日　山を看

て　酒　満傾す」と歌う「宣州の開元寺の南楼」詩もあって、杜牧は、この宣州の開元寺に深い愛着を示した。

さらに杜牧は、後に「何人か為に倚(よ)らん　東楼の柱、正に是れ　千山　雪　渓（宛渓）に漲る」(「宣州の開元寺に寄題す」）と詠んで懐かしむ。

杜牧と交遊した趙嘏(ちょうか)の「開元寺の水閣に題す」詩（『輿地紀勝』巻19）に、「(宛渓の）波は十里を穿って　橋は寺に連なり、絮（柳絮）は千家を圧して　柳は春を送る」とあるのは、暗に前掲の杜牧詩の影響下にあろう。またやや後の杜荀鶴「開元寺の門閣に題す」詩の「何れの処の画橈(がじょう)（画船）か　緑水を尋ね、幾家(いくいえ)の鳴笛ぞ　紅楼に咽ぶ」(『唐風集』巻２）も、同じであろう。

杜牧の名詩に彩られた宣州開元寺は、北宋期、景徳寺と改名されたためであろうか。詩跡として成長することはなかったようである。宣城出身の北宋の詩人、梅堯臣は、「開元寺の明上人の仮山(庭園の築山）に寄題す」(『宛陵集』巻36）を作るが、この開元寺は、景徳寺を旧称で呼んだものであろうか。(注２)

宣州開元塔

現在、寺跡の一角には、北宋期の姿を留める開元塔（景徳寺多宝塔、９層高さ34メートル）のみが残っている。明の著名な劇作家・湯顕祖は「開元寺の浮図（仏塔)」詩のなかで、美しい眺望を、「嶺樹　嵐（山気）に湿うかと疑い、岩花　瞑（＝暝、日暮れ）に入りて薫る」と歌っている。(注３）　塔の倒影は、かつて宛溪のさらに東を北流していた句溪（現在、この川は痕跡のみを残す）の水面に映っていた。これが「句溪の塔影」と呼ばれる宣城の勝景である。清の劉方靄「句溪の塔影」詩にいう、「中より湧く　江城（宣城）の塔、波の痕　迴るも迷わず（明瞭なさま)」と。(注４）

（注１）　「宣城市交通導游図」(山東省地図出版社、2005年１月第２版）による。
（注２）　『大明一統志』巻15、寧国府・景徳寺の条に、「府城の内に在り。本と晋の永安寺。唐、開元に改む。宋、又た今の名に改む」とあり、『江南通志』巻47、寧国府・景徳寺の条に、「宋の景徳中、今の名に更たむ」という。
（注３）　安徽宣城市文化局編『歴代名人吟宣城』(皖内部性資料図書2004－092号、宣城市中亜印務公司印刷）所収。
（注４）　宣州市地方志編纂委員会編『宣州概覧』(黄山書社、1988年）64頁所引による。

⑤響　山

宣城市の東南郊外1.5キロの地にあり、山の形が葫蘆（ひょうたん）に似ているため、俗に葫蘆山とも呼ばれる景勝地。 李白が天宝12載（753）の重陽節の日、宣城の別駕李某とともに新たに築かれた楼台に登って宴会を開いたときの作とされる「九日登山」詩に、「土を築いて　響山に接し、俯して臨む　宛水（宛溪）の湄に。胡人　玉笛を叫らし、越女　霜糸（白き絃）を弾く」云々とある。同じ李白の「宣城にて九日　崔四侍御　宇文太守と敬亭（山）に遊ぶを聞く。余　時に響山に登りて　此の賞を同じゅうせず。酔後、崔侍御に寄す　二首」詩も、同時期の作とされる。その１に、「晩に南峰（城南の響山）より帰れば、蘿月（ツタカズラの間から漏れる月光が）　水壁（みぎわの石壁）に下る」という。

元和２年（807)、宣州刺史・宣歙池観察使、路応は、響山亭を作り、さらに軍隊の兵営を左右に設置した。翌年、それをほめたたえた宰相権徳輿の文が、響山の岩に刻まれた。権徳輿「宣州響山の新亭・新営の記」(『全唐文』巻494）には、付近の風景がこう記されている、「両岸聳峙し、蒼翠対起す。其の南に響潭を得たり。清泚（清澄）にして鑑とすべく、縈迴して澹淡なり」と。響山の東南端は宛溪と青溪に臨み、二水の合流点に、響潭があった。こうして響山の名勝は知られ始めたのである。

響　　山

北宋の著名な詩人で、宣城出身の梅堯臣が、「宣州雑詩二十首」(『宛陵先生集』巻43）その３の冒頭で、「一たび響山の畔を過れば、常に路中丞を思う」と歌うのは、響山を開発した路応への思慕である。同じ詩中の「旧刻　磨滅多し」の旧刻とは、前述の「唐宣州響山新亭新営記」(権載之[徳輿] 撰、『輿地紀勝』巻19）を指していよう。梅堯臣はまた、「久しく門前の勝を憶い、聊か逸興に乗じて遊ぶ」の句で始まる五律「響山に遊ぶ」詩の中で、幽邃・静寂な風景を、「寒篙（船をおし進めるさお）　渓曲に進み、古木　城頭に暗し。鳥は空潭を過ぎて響き、船は碧瀬に随いて流る」と歌うが、初めて響山を詠んだ詩人李白には、全く触れていない。

ところが元の呉師道の五言古詩「九日　響山に登り、同遊者に奉呈す」(『元詩選』巻44）は、登高が行われる重陽節に作られた李白の詩を念頭に歌い始める。「響山は　響潭に臨み、曽て太白(李白の字）の来るを識れり。我　其の間（その地）に遊ばんと欲し、却って仙才に非ざるを愧づ。況んや乃ち微官を博て、終年　塵埃に走るをや。幸いに茲に　九日至り、群彦と陪うを獲たり」云々とある。そして「前に孤城（宣州城を指す）の低きを睨い、下に清渓の迴るを瞰る。諸峰　遠色を送り、攬結（攬は手につかむ）　何ぞ雄なる哉。野菊　半ば英を含み、濁醪（濁り酒）　初めて発醅す」とうたう。

清初の著名な詩人で、宣城出身の施閏章は、「唐寓庵使君に陪いて舟を響山潭に汎べ、因りて玉山に登る」詩（『学余堂詩集』巻37）の前半に、「陵陽（宣城）の南畔　釣竜湾、赤壁（注１）の高台　緑水の間。一たび錦袍（李白が宮中で着た礼装用の錦の上着。ここでは李白を指す）仙去して後より、今に到るまで　烟月　意　長えに閑なり」云々とあり、「地は故と竇子明　白竜を釣りし

処、李太白　嘗て游詠す」の原注が付されている。響山は、李白ゆかりの詩跡として認識されるようになったのである。(注２)

今回、我々は、家々や畑の間を縫って、ようやく響山（葫蘆山）を訪ねた。昔の面影には乏しかったが、宣城の響山を探索した訪中団は、おそらく我々が唯一ではなかろうか。ここにその写真を発表できるのは、深い喜びである。

（注１）　いわゆる響山の赤壁と呼ばれる、高さ６メートル、幅10メートルの、水辺の名勝。清の蔡大杰「響山の赤壁」詩にいう、「響山突出す　鰲峰（宣城のまちの中にある）の前、東南に雄踞して　虎の眠れるに似たり」(宣州市地方志編纂委員会編『宣州概覧』黄山書社、1988年、65頁所引）と。

（注２）　施閏章にはもう１首、「響山臨眺　諸子と同に杓司を懐う有り」(『学余堂詩集』巻25）も伝わる。

⑥広教寺（俗称双塔寺）

宣城市北郊2.5キロの著名な詩跡、敬亭山の南麓にあった古刹の名。晩唐の大中３年（849)、宣歙観察使・宣州刺史の裴休によって建立された。(注１）　北宋の紹聖３年（1096）には、27メートルの間隔で東西に対峙する方形（唐代風）の美しい仏塔、いわゆる双塔が建造されている。それぞれ７層が残存し（塔頂崩落)、高さ約17メートル、第２層の内壁には、元豊４年（1089)、北宋の蘇軾が書いて広教院の模上人に贈った『観自在菩薩如意輪陀羅尼経』（楷書）の墨跡を、15年後に模刻した石がはめ込まれている。かくして広教寺は、俗に双塔寺と呼ばれることになる。(注２)

宣城出身の北宋の著名な詩人・梅尭臣は、広教寺に言及する詩を数首残している。「正仲・屯田と与に広教寺に遊ぶ」詩（『宛陵先生集』巻41）には、「古寺　深樹に入り、野泉　暗渠に鳴る。酒杯に　茗具（茶具）を参え、山蕨（わらび）　盤蔬（大皿に盛られた食べ物）に間う」とあり、「諸弟及び李少府と与に広教の文鑑師を訪ぬ」(『宛陵先生集』巻37）という詩には、「紫蕨は老ゆるも食うに堪え、青梅は酸なるも嫌わず。野蜂　時に座に入り、岩鳥　或に檐を窺う」という。いずれも俗塵を断った静謐な山寺の描写である。

北宋末の呂本中「昭亭（敬亭山）の広教寺」詩（『東莱先生詩集』巻11）には、「草暗くして　鼯鼠（むささび）出で、山深くして　鵯鵊（夜明けに鳴く黒い小鳥の名、俗称は催明鳥）鳴く」と歌う。元の何儒行「清明の前一日　施敬叔、約して広教寺に遊ぶ」詩（『宛陵群英集』巻９）には、境内の幽静な神聖さが、「山中　雨ふらざるに　花　常に潤い、林下　人無きに　蘭自から馨る」と詠まれている。続いて明の宣城出身の徐夢麟「広教寺に遊ぶ」詩（注３）にいう、「真界（仏教寺院）　黄蘗（希雲）に開かれ、千年　塔　并存す。松風　絶壑（深く険しい谷）に生じ、蘿月　頽門を掩う」云々と。

そして宣城出身の清の著名な詩人・施閏章「双塔寺」(題下の原注「敬亭の麓に在り。黄蘗禅師より昉まる。一に広教寺と名づく」、『学余堂詩集』巻８）には、「双塔　老翁の如く、蒼顔（老衰した顔色）　肩を比べて立つ。上に玉局（蘇軾）の銘有り、摩抄（なでる）せんとするに　層級(多くの階段）を隔つ」とあり、さらに建立時の荘厳な規模を、「裴守（裴休）　招提（寺院）を侈くし、棟宇　原隰（高原と低湿地）を蔽う」と思いやる。

広教寺（双塔寺）の場合、特定の源泉と言うべき名詩は見あたらないが、長く歌い継がれてきた詩跡である。現在、山門等が造られて整備されたが、寺院はすでに無く、千年弱の風雪を耐え抜いた双塔のみが、「老翁の如く」立ち、往事を偲ばせている。

（注１）　『江南通志』巻175にいう、「大中三年、裴休　宣州を知めしとき、（黄檗希雲を）迎えて開元寺に居らしめて法を受け、広教寺を敬亭（山）の南麓に創る」と。裴休は、大中２～３年、宣歙観察使・宣州刺史であった。
（注２）　『江南通志』巻47、広教寺の条に、「山門に浮屠（仏塔）の　双峙する有り。一に双塔寺と名づく」とある。
（注３）　安徽宣城市文化局編『歴代名人吟宣城』（皖内部性資料図書2004－092号、宣城市中亜印務公司印刷）所収。

滁　州

⑦西　澗

滁州市の西郊（約1.5キロ）にあった谷川の名。もと小沙河に属し、滁州西部の山間から流れ出て東流し、烏兎河（烏土河）となり、滁州の城を貫流して、城の東側を南流する清流河にそそぐ。その主な河道が、滁州城の西にあるための呼称。1950年代の末、城西水庫［ダム］が作られて水没した。「滁州市区交通旅游図」（安徽人民出版社、2003年刊）によれば、現在「城西湖」と呼ばれる、その湖面下に西澗の遺跡があることになる。

西澗は、建中３年（782）の夏、滁州刺史となった自然詩人、韋応物が、建中４年か翌興元元年（784）の春、あるいはまた、興元元年の冬、滁州刺史をやめて、しばらく西澗付近に寓居していた貞元元年（785）の春に作られた名作、「滁州西澗」詩（独憐幽草澗辺生、上有黄鸝深樹鳴。春潮帯雨晩来急、野渡無人舟自横）によって、詩跡化された場所である。詩題は、唐人選唐詩（『御覧詩』、『又玄集』巻中、『才調集』巻１）には、いずれも単に「西澗」に作る。本詩は、北宋の紹聖２年（1095）、滁州の長官になった曾肇が、慶暦年間（1041～48）以前の滁州の事跡を詠んだ詩文を集めた『慶暦前集』の跋（南宋の王象之『輿地紀勝』巻42所引）に、「李衛公（徳裕）著懐嵩之記、李庶子（幼卿）刻泉石之銘、韋応物形野渡之詠」とあるように、滁州を詠んだ唐代の詩の代表作であった。なお韋応物は、「西澗即事　盧陟に示す」詩のなかで、「空林に　細雨至り、円文　遍水に生ず。永日　余事無く、山中　木を伐るの声」云々と歌い、貞元元年の元日になる「歳日　京師の諸季（韋）端・（韋）武らに寄す」詩では、「松を聴く　南巌の寺、月を見る　西澗の泉」とも歌う。

金の趙秉文は、「西澗に和す」詩（「擬和韋蘇州」の１、『閑閑老人滏水文集』巻５）を作っている。それは、韋詩に対する次韻詩であり、「雨荒竹逕草叢生、樹隔前渓一犢鳴。歩尋幽澗疑無路、忽有人家略彴横」（雨に竹逕［竹の生える小道］荒れて　草叢生し、樹は前渓を隔て　一犢（一頭の子牛）鳴く。歩みて幽澗を尋ぬれば　路無きかと疑い、忽ち人家有りて　略彴［小さな木の橋］横たわる）という。

明初、呉中の四傑の１人、徐賁は、西澗の地を訪ねて、韋応物の詩と人柄を偲び、「滁州の西澗」詩（『北郭集』巻10）を作った。「渡連西澗草還生、六月黄鸝幾箇鳴。為憶風流韋刺史、也曾来此澗辺行」（渡しは西澗に連なりて　草還お生じ、六月　黄鸝　幾箇か鳴く。為に憶う　風流なる　韋刺史、也た曾て此に来りて　澗辺を行く）。これは、韋詩の韻字のうち、生・鳴をその順序のまま

に用い、最後の韻字「横」のみ「行」字に換えて作った、依韻の七言絶句である。

明初の鄒緝も、「滁守陳璉の　任に之くを送る」詩（注１）に、「東郊　春已に歇み、西澗　潮還お生ず」と歌い、西澗が滁州を代表する詩跡であることを表している。

また明の著名な文人、文徴明は、「胡栢泉に寄す」詩（『甫田集』巻14）の中で、「遥かに知る西澗　春潮急にして、野渡の孤舟　尽日横たわるを」と歌った。滁州出身の范麟の「西澗」詩（注２）は、韋詩を踏まえた、典型的な七律の詩跡詩である。「逶迤西澗郡城西、到晩潮声拍岸急、帯雨好山青隠隠、凝煙幽草緑萋萋。孤舟穏渡桃花浪、黄鳥間啼楊柳堤。消長誰能明此理、且将佳致入新題」(逶迤［長く連なるさま］たる西澗　郡城（滁州）の西、晩に到りて　潮声　岸を拍って急なり。雨を帯ぶる好山　青くして隠隠、煙を凝らす幽草　緑にして萋萋。孤舟　穏やかに渡る　桃花の浪（春の増水)、黄鳥（ウグイスの１種。黄鸝と同意）間に啼く　楊柳の堤。消長　誰か能く此の理に明らかなる、且く佳致（すばらしい景色）を将て　新題［新作の詩］に入れん)。

旅の機会を捉えて熱心に詩跡を探訪した清初の大詩人、王漁洋（士禎）は、康熙24年（1685）の５月29日、南海（広州）からの帰途、滁州を通り、「西澗」詩（『漁洋山人精華録』巻10）を作った。時に52歳である。「西澗蕭蕭数騎過、韋公詩句奈愁何。黄鸝喚客且須住、野渡庵前風雨多」(西澗に　蕭蕭（馬の声）として　数騎過る、韋公（応物）の詩句　愁いを奈何せん。黄鸝　客（旅人たる私）を喚べば　且く須らく住まるべし、野渡の庵前　風雨多し)。詩の自注に、「澗の上りに野渡庵有り、韋詩（の結句）を取って命名す」とある。譚慶竜編『琅琊山詩詞選』（黄山書社、1990年）には、野渡庵について、「寺庵の名。旧跡は西澗の水辺にあった。南北交通の通路にあるため、宋以後、僧がここに住み、寺庵を建てた。現在久しく廃れている」と注する。

滁州の西澗は、韋応物「滁州の西澗」詩１首によって詩跡化し、詩の意境と韋応物の人柄を偲ぶ詩跡となった。 今日、すでに清らかな湖水の下に沈んでいるため、その地を直接探訪できないのは残念である。

（注１）　譚慶竜編『琅琊山詩詞選』（黄山書社、1990年）所収。
（注２）　譚慶竜編『琅琊山詩詞選』所収。同書は、「桃花浪」を「地名。西澗水の水源、桃花澗を指す」とするが、誤りであろう。ちなみに本詩は、第２句の韻が踏み落としである。(第１句は押韻)

⑧琅琊山

琅琊山は滁州の西南５キロの地にあり、その名は、東晋の元帝司馬睿が即位する前、「瑯（＝琅）琊王と為り、地を此の山に避け」(戦乱を避けて山に寓居）たことにちなむという（『太平寰宇記』巻128)。(注１）　中唐の顧況「琅琊の上方に題す」詩にいう、「東晋の王家　此の渓に在り、南朝の樹色　窓を隔てて低る」と。韋応物の詩中では、西山とも呼ばれている。北宋の王禹偁「琅琊山」詩（『小畜集』巻10）の題下自注には、「東晋の元帝、琅琊王を以て、常て此の山に居る。故に渓山皆な琅琊の号有り。知らず　晋已然　何の名なるかを」という。

唐の滁州刺史李幼卿（注２）は、着任した大暦６年（771)、僧法深とともに琅琊山中に寺院を建て、境内に庶子泉を穿った。寺の名は宝応寺、宋代、開化寺となり、琅琊寺は、その通称である。

庶子泉の名は、李幼卿の前官、太子庶子にちなむ。(注３)　これ以降、琅琊山の開発が進み、建中３年（782)、滁州刺史となった韋応物は、「琅琊山寺に遊ぶ」「元錫と同に琅琊寺に題す」「秋景　琅琊の精舎（寺）に詣る」詩などを書いている。

北宋の至道元年（995)、滁州知事となった王禹偁は、「琅琊山」詩を作り、「名を流すは　東晋よりし、積翠　南譙（郡名。滁州の地）に満つ」と歌い、寺（開化寺）の名勝を詠んだ「八絶詩」８首（『小畜集』巻８）を作った。北宋中期には欧陽脩ゆかりの酔翁亭や豊楽亭（亭のある豊山は、広義の琅琊山の中に含まれる）が造られ、欧陽脩もまた、「瑯琊山六題」詩（庶子泉・瑯琊渓・帰雲洞など）を作っている。かくして北宋後期の曾肇『滁州慶暦集』序にいう、「泉石林亭の勝、天下に聞こゆるに至る」(『輿地紀勝』巻42所引）状況が生まれた。これは、主に「人口に膾炙し、天下伝誦」(『大明一統志』巻18）した、欧陽脩の名文「酔翁亭記」の力であった。

琅琊寺と庶子泉・瑯琊渓（瑯琊寺の前から谷に沿って曲折しつつ、現在の深秀湖にそそぐ渓流。命名者は李幼卿）等は、いずれも琅琊山の代表的な詩跡であるが、今回の訪中ではたまたま道路の補修工事のため酔翁亭付近で車を降りざるをえず、参観を断念した。琅琊寺（民国５年［1916］再建）は、酔翁亭の前の道を進みゆき、山中の奥に入ったところにあったからである。譚慶竜編『琅琊山詩詞選』(黄山書社、1990年）は、詩跡としての琅琊山を考えるうえで参考になる。

（注１）　中唐の独孤及「琅琊渓述」序にいう、「按図経、晋元帝之居瑯琊邸而為鎮東也、嘗遊息是山、厥跡猶存」と。

（注２）　『大明一統志』巻18には、李幼卿について、「大暦中　太子庶子より出でて滁州を知し、、善政有り。暇に琅琊山に遊び、景物を号して八絶と為し、滁の人　之を慕う」という。これは、独孤及「琅琊渓述」にもとづく。八絶は、王禹偁の「八絶詩」によれば、庶子泉・白竜泉・明月渓・清風亭・望月台・帰雲洞・陽冰篆・垂藤蓋をさす。

（注３）　姫樹明・兪鳳斌編著『琅琊山』(黄山書社、2003年再版）49頁によれば、明の嘉靖32年［1553]、鄭大同が濯纓の２字を石に刻して以降、庶子泉は濯纓泉とも呼ばれるようになったという。

⑨酔翁亭

北宋の官僚文人、欧陽脩は、慶暦５年（1045)、滁州の知事に左遷された。その翌年、琅琊寺の僧智仙は、彼のために風景の美しい琅琊山の麓に亭を作った。欧陽脩は、これを酔翁亭と名づけ、「滁を環りて　皆な山なり」で始まる名文「酔翁亭の記」を作り、まだ40歳であるのに自ら酔翁と号した。そしてしばしば賓客と一緒に、「翼然として泉上に臨んだ」酔翁亭を訪れては、なごやかな宴会を楽しんだ。「酔翁亭の記」にいう、「酔翁の意は、酒に在らず、山水の間に在るなり。山水の楽しみは、之を心に得て、之を酒に寓するなり」と。泉上とは、「山行六七里、漸く水声の　潺潺として両峰の間より瀉ぎ出づるを聞く者は、譲泉（醸泉とも書く）なり」と書かれた、譲泉のほとりを指す。彼の「滁州の酔翁亭に題す」詩には、「但だ（ひとえに）愛す　亭下の水の、乱峰の間より来るを。声は空より落つるが如く、両簷の前に瀉ぐ」という。

今日、譲泉とされるものは、酔翁亭の前を流れる小さな渓流（玻璃沼）のほとりに湧き出た、正門（欧門）のそばにある山泉を指し、清の康熙20年（1681)、当地の長官王賜魁が刻した「譲泉」

の文字が伝わる。ただ水音があまり響かないのは、環境が昔と変わったためなのであろうか。讓泉に対する疑問が生じる。(注１)

酔翁亭の入り口

明の永楽２年（1404)、滁州知事となった陳璉は、「酔翁亭記」を踏まえた「酔翁亭」詩を詠み、明の王世貞（16世紀後半）は、「滁陽に抵(いた)りて拱辰(きょうしん)石（石星、字拱辰）太僕の　将に至らんとするを聞いて留贈す」(２首その２、『弇州続稿』巻22）のなかで、「琅琊の山色　四時（四季）妍(うつく)し、最も喜ぶ　清流　讓泉と号するを。前輩（欧陽脩）の風流　今又た見る、使君（石星）　剛(まさ)に及ぶ　酔翁の年（40歳）に」と歌い、明の于冕(うべん)は「酔翁亭に遊ぶ」詩のなかで、ついに訪問できた喜びを、「平生　夢想を労し、今日　登臨を喜ぶ」と歌っている。(注２)

熱心に詩跡を探訪した清初の大詩人、王漁洋（士禎）は、康熙24年（1685）の５月28日、南海(広州）からの帰途、滁州に着くと、雨のなか酔翁亭や豊楽亭等を訪ね、五律「雨に酔翁亭に過ぎる」詩３首（『漁洋山人精華録』巻10）等を作った。時に52歳である。その１には、「門前　荇(こうけい)渓の石、亭下　醸泉の流れ。禽鳥　鳴くこと何ぞ楽しき、松篁（松や竹の林）　颯(さつ)として秋に似たり」とあり、その３には、「欧梅　池閣に映じ、半畝（の地に）　清陰を散ず」という。荇渓の石は、「即ち菱渓石」(作者の自注)、欧陽脩が菱渓（滁州城の東2.5キロの渓流）から三頭の牛に引かせて運んできたとされる岩をいう（現存)。また欧梅とは、欧陽脩の手植えとされる梅の木。亭の北にある高さ７メートルの古梅が、それであると伝える（後人が植え直したものともいう)。たとえ伝承にすぎないとしても、詩中に詠まれたものが存在するのは、きわめてうれしい。酔翁亭は、欧陽脩の名文「酔翁亭記」と彼の闊達な人柄を追慕する詩跡なのである。(注３)

現存する醉翁亭の建物は、清の光緒７年（1881)、全椒出身の薛時雨が再建したものであり、二賢堂（欧陽脩と王禹偁をまつる祀堂、欧王二公祠）や宝宋斎（蘇軾筆の「醉翁亭記」の碑刻を保護する）などもある。醉翁亭自体も興廃を繰り返したが、しだいに付属の建築物ができて規模が拡大した。今日、北京の陶然亭・湖南の愛晩亭・蘇州の滄浪亭とともに、中国の四大名亭に数えられ、その筆頭に位置する。

醉翁亭の西南200メートルのところには、欧陽脩紀念館（原名は「醉翁亭記」にもとづく同楽園）がある。

ちなみに、欧陽脩は、慶暦６年（1046)、滁州の西郊にある豊山の北麓、幽谷泉（宋の元祐２年[1087]、知事の陳知新が改修し、名を紫薇泉に変えた［注４］）のほとりに、豊楽亭を建て、「豊楽亭記」を書いた。ここは、醉翁亭に次ぐ、欧陽脩ゆかりの詩跡として、1996年、豊楽亭等が再建されたが、現在未開放で参観できなかった。早期の開放を切に望んでいる。

（注１）　明初の洪武８年（1375）の歳末、滁州を通った宋濂「琅琊山に遊ぶ記」には、「泉の　両山の間より瀉ぎ出でて、流れを分かちて下る有りて、釀泉と曰う。潺湲として清激、毛髪を鑑るべし」(『文憲集』巻２）とある。
（注２）　姫樹明主編『滁州古詩文選読』（天馬出版、2004年）所収。
（注３）　『漢詩の事典』第３章、滁州（西澗・醉翁亭）の条参照。
（注４）　姫樹明・兪鳳斌編著『琅琊山』（黄山書社、2003年再版）59頁による。

（附　録）

⑩陋　室

長慶４年（824)、和州刺史となった劉禹錫が、在任中に建てた州治（州庁）内の住まいの名。陋室は陋屋の類語。安徽省和県城（歴陽鎮）内の、陋室公園の中に再建されている。南宋の王象之『輿地紀勝』巻48，和州・景物上・陋室の条に、「唐の劉禹錫の闢く所。又た陋室銘有りて、禹錫の撰する所、今見存（現存）す」とあり、同書同巻、碑記・唐劉禹錫陋室銘の条には、「(唐の著名な書法家である友人）柳公権の書、庁事（役所の執務室）の西偏の陋室に在り」という。

劉禹錫の「陋室銘」とは、「山不在高、有仙則名。水不在深、有竜則霊。斯是陋室、惟吾徳馨」(山は高きに在らず、仙有らば則ち名あり。水は深きに在らず、竜有らば則ち霊あり。斯は是れ陋室にして、惟だ吾が徳のみ馨れり」）で始まる、全81字の短い名文。(ただし、劉禹錫の文集には未収であり、偽作の疑いもある。『全唐文』巻608等に所収［注１］)　元の王義山の詩（「和申屠御史来豫章韻」）の「一衣帯水繞洪城、水不在深竜則霊」(『稼村類藁』巻３）のごとく、「陋室銘」を踏まえた句を生んだが、陋室そのものは、詩中に詠まれて詩跡となることはなく、単なる名勝古跡に終わったようである。

しかし陋室自体は、劉禹錫の「金陵五題」(「山は故国（古都）を囲んで　周遭として在り」で始まる七絶「石頭城」、「朱雀橋辺　野草花さき」で始まる七絶「烏衣巷」を含む５首）や、晩春の美しい風景を詠んだ名句「野草芳菲たり（花々が咲き匂う）　紅錦の地、遊糸繚乱たり（空中に漂う[蜘蛛の子が吐き出す］糸が、乱れてからみつく）　碧羅（あおい薄絹）の天」(「春日　懐いを書

し、東洛の白二十二［居易］・楊八［帰厚］に寄す」詩、『和漢朗詠集』春興所収）などが誕生した場所として忘れがたい。

現在の入口の門首に見える 陋室の２文字は、著名な詩人臧克家（ぞうこくか）の筆になる。また 陋室内の主室には、劉禹錫の塑像が立ち、「政擢賢良」(政は賢良を擢（ぬきん）づ）の扁額がかかる。陋室の建物は、清の乾隆年間、和州知事宋思仁が再建した後、光緒年間・民国時代の補修を経て、1987年、大規模に修復されたものという。(注２)

（注１）　南宋の撰者未詳『錦繍万花谷』後集巻23には「陋室銘」の１部分、明の彭大翼『山堂肆考』巻130には、全文を収める。ちなみに、伊藤正文・一海知義編訳『漢・魏・六朝・唐・宋散文集』（平凡社、中国古典文学大系、1970年）には、「陋室銘」の訳注を収める。また偽作説に関しては、陶敏・陶紅雨『劉禹錫全集編年校注』（岳麓書社、2003年）1458頁参照。

（注２）　現在、陋室のところに建つ「陋室簡介」による。『嘉慶重修一統志』巻131（原44冊），和州・古蹟、陋室の条には、「州治の後ろに在り、遺址猶お存す。唐の劉禹錫の築く所、陋室銘有り」という。

［本稿は、科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築ー詩跡の概念・機能・形成に関する研究ー」(課題番号17320053、研究代表者植木久行）の研究成果の１部である。また本稿は、すでに掲載済みのホームページ「中国詩跡」(http://www.shiseki.com/）の文章を再度推敲したものである］